



Dogu no Tomo  
著 土偶の友

ill. むらき

# 主な登場人物



**アフト**

孤児院で暮らす少年。  
サクヤに意味深な  
問いかけを  
するが——



**青龍**

サクヤに助けられた聖獣。  
木像の姿がお気に入り。



**リオン**

研究家気質な冒険者。  
実はファリラス王国の第三王子。



**クロノ**

まっすぐな性格の冒険者。  
実はファリラス王国の第二王子。



**ワイン**

とある洞窟に  
閉じ込められていた  
フェンリル。  
サクヤに力の  
使い方を教え、  
従魔となる。

**サクヤ**

気が付くと子供の姿で  
異世界にいた、  
本作の主人公。  
神聖魔法や創造魔法と  
いった、珍しい魔法を  
使える。

## 第1話

わたしはサクヤ。ある日森で目を覚まし、五歳の身体になつていた元会社員だ。  
森の中で出会った白虎びやっこの聖獣であるヴァイス、フェンリルの聖獣であるウインと從魔契約を結んだわたし。

その時に、「創造魔法」そうぞうまほうと「神聖魔法」しんせいまほうの両方を持つわたしは、百万年に一人の存在だと教えられ、悪い人に利用されたくないからバレないようにはじめに決意した。

その後、近くにあつたケンリスの街に移つたわたしは、そこで異世界生活を楽しむことにする。  
王族であることを隠している冒險者のクロノさんとリオンさん、それから魔道具を作らせたら  
国一番だというプロフェッサーや、魔物の研究では世界的な権威だという先生と知り合つたり、街  
に迷い込んできたエアホーンラビットっていう魔物の特異体とくいたい——いわゆる変異種と仲良くなつた  
り……街での生活に馴染んでいった。

そんなケンリスの街では、領主の館に聖獣の一体である青龍せいりゆうが囚われていた。

青龍を助けて領主を捕縛したわたし達は、正体を明かしたクロノさんとリオンさんの申し出で、  
王城に招かれたことになった。

そして訪れた初めての王都！

建物の大きさから人の多さまでケンリスとはくらべものになら

なかつた！

お城では力を持つ貴族の人達と会つたり、観光をしたり、パーティに参加してモデルをしたりした。楽しい素敵な街だと楽しんでいたんだけど……。

どうやら王都に出回る小麦に、魔力を暴走させるような毒が混ざっていたらしく、いたる所で騒ぎが起きてしまう。

私は青龍の力も借りて、その毒を中和する魔力水を大量に精製。そして小麦を出回らせていました、元国王派貴族の子息であるフリツツを捕らえることに成功する。

彼曰く、小麦を取り扱う国王派の商会の信用をなくすことで、国王の力をそぐことが目的だったみたいだけど……結局、その黒幕は分からぬままみたい。

ずっとモフモフのんびり楽しい旅をしたいと思っていたんだけど、もっと平穩な旅にはならないのかな。

ヴァイス、ワイン、ルビー、クロノさん、リオンさん。みんなが無事でいてくれれば、わたしはそれでいいんだけど！

「わたし、甘いものを食べに行きたいです！」

事件から一週間後、わたしは孤児院を訪れていた。

そこで院長に「王都から離れようと思つていてる」と告げたところ、「甘いものが食べられて、ゆつくりできる村がある」ということを教えてもらったのだ。

彼女は素敵な笑顔のまま、わたしにきれいな封筒を差し出してきた。  
「では、これをどうぞ」

「これは……？」

「その村……スウォーティーの村の一番のお菓子店、パステールの紹介状です。こちらがあれば、無碍むげに扱われることはないでしよう。お使いください」

「わたしはただ食べたくて行くだけなのに、そんなのは必要ありませんよ？」

ワインに乗つてヴァイス達と一緒に適当に甘いものを食べるだけだ。だからそんなすごい紹介状はいらないと思う。

「ですが、これがないと村一番のお店限定ファイナルスペシャルロールケーキは食べられないかもしませんよ？ 普通の予約ですと一年は待つことになります」

「一年ですか!?」

え？ この世界でも一年待ちなんてあるんだと驚いていると、彼女は説明してくれる。

「ええ、それは王宮にも献上されているほどの品です。となると当然、貴族も欲していますから、それだけ待つことになるのです。王宮に行つて食べることもできると思いますが、そちらの方が多いですか？」

「……紹介状をいただいてもいいですか？」

「ええ、もちろん。楽しんできてください」

わたしは王宮に行く面倒と、彼女から紹介状を受け取るのを天秤にかけ、素直に厚意に甘えるこ

とにした。

「ありがとうございます。楽しんできます」

「ええ、ぜひ楽しんできてください。そうそう、ボルツ」

「ん？ なんだ？」

院長がいきなり話をボルツさんに振る。

彼はわたしと院長の話をのんびり聞いていたのに、急に話しかけられた理由が分からぬようだ。

「あなたは何もしなくてもいいのですか？」

「院長……そうだな。俺ができることと言えば、これを受け取つてくれ」

ガシヤンと重たそうな音と共に、ボルツさんは机の上に布でできた袋を置く。

「あの、これは？」

わたしはその音で、なんとなく中身を想像できた。

けれど、一応……確認のために、ボルツさんに聞く。目を輝かせてかじりつこうとしているヴァ

イスが、それに近寄らないように抱っこしながら。

「それなりの額のゴルドが入つている。受け取つてくれ」

「そんなことはできませんよ!? なんでいきなり？」

訳が分からず聞くと、彼はその理由を話してくれる。

「決まつてるだろ？ 礼だよ、礼」

「礼つて……別にわたしは……」

「俺はこれでも裏の顔をやつてんだ。助けてもらつて、それを何もせずに終わらせるのは示しがつかねえだろ？」

「それは……」

「面子……というのがあるんだろうか。まあ……確かに、それを……潰すのは忍びない。

わたしが少し悩んでいると、ボルツさんがささりに言う。

「もし受け取ることに抵抗があるなら、この金で孤児院のガキ達の分、菓子を買ってきてくれないか？ んで余つたのは依頼料として受け取つてくれ」

「そんな、お菓子の代金としても多いですよね？」

どう考へても、わたし一人では持てるかどうかといった量のお金だ。

全部使つてお菓子を買おうとしたら、買い占めをするレベルになつてしまふだろう。そんなのは他の人にとつても迷惑だろうからできない。

「依頼料だつて言つただろう？ 別に買つてこなくとも問題ないからな。とりあえず受け取つてくれねえか。この通りだ」

そう言つてボルツさんは頭を下げる。

「！ 分かりました！ 分かつたので頭をあげてください！」

「お、そうか。助かるぜ。嬢ちゃん」

「いえ……それではわたしは行きますね」

これ以上ここにいると、また別のものも持つていけど言われるかもしない。

そういうことをしてほしいと思う。  
「それでは、わたしはこれで失礼します。ありがとうございました！」

わたしはワインの背中に乗つてから、振り返つてそう言つた。

「お待ちください」

「はい？」

でも、出ていく前に院長に止められる。

「お一人で行くつもりですか？」

「ワイン達が一緒にいるので行けるかなと。クロノさん達は城の方で忙しそうにしていましたし、伝言だけ残しておこうと思つていたんですが」

「ふむ……ボルツ」

「分かってますよ。俺の部下を十人ほどでいいですかね？ 信頼のおける精銳をお付けしましょう」

「ちよつと待つてくださいよ」

そんな大所帯で行くなんて、絶対に何かあると思われる。

「あんな大金をもじらつただけでもありえないのに、流石にそこまでしてもらう訳にはいかない。

「どうした？ 数が足りないか？」

「いえ、逆です。わたしにはヴァイス達がいるので、護衛はいりません」

「でも、道案内は……」

「大体でいいので教えてくだされば、道なりに沿つていきますから」「いや、従魔がいると言つても、何があるか分からぬ。信頼していない訳じゃないぞ？ だが心配なんだ。少しだけ道案内をつけてくれ」

「十人も道案内はいりませんよ？」

「どんな道案内をするつもりなんだろう？ 十人で道案内……全方位に一人ずつ配置してくれるとかだろうか？ そんなバカな。」

わたしがそんなことを考へていると、後ろから声をかけられる。  
「話は聞かせてもらつたよ」

「？」

わたしが後ろを振り向くと、そこには入り口に背を預けて腕組みをする先生がいた。

「え？ 先生？」

「久しぶりだね、サクヤ君。相変わらず可愛いようでなによりだ。クロノ達から連絡があつてね。飛んできただんだ」

「え……牧場の方は大丈夫なんですか？」

「サクヤ君がアベルを励ましてくれたんだろう？ そのお陰で彼は今、すごく精力的にやつてくれていてね。ぼくもいらなくらいなんだ」「すごいですね！」

「でも、出ていく前に院長に止められる。

「ありがとう。君のお陰だからね」

「わたしは大したことはしていませんよ」

アベルさんが頑張っている。その言葉を聞けて、とても嬉しい。

色々と悩んでいたようだつたから、それも解決したのだろう。

「という訳で、ぼくがサクヤ君の案内をして、スウォーティーの村に連れていくよ。お二方もいいかな?」

先生がそう言つて、院長とボルツさんに視線を向けると、二人は頷くのだった。

◇◆◇◆◇

「どういうことだ!」

そこは、豪華な家具がこれでもかと置かれている部屋だつた。

声の主は天蓋のついたベッドに座り、手には平民では一生手の届かないようなグラスを持つている。当然、中身も一杯で平民の稼ぎひと月分に相当する。

彼は入り口付近に跪いている男に、恫喝にも等しい声を、もう一度かけた。

「答えろ! なぜこんなにも簡単に騒動が収まつたのだ!」

「……それが……我々にも……ただ」

「ふざけるなよ! いざれ捨て駒にするつもりだつたとはいえ、あいつらからこちらの情報が出た

らどうするつもりだ!」

「いえ、それについては……」

「第一! あれを与えておいて捕まるなど無能すぎる! 全く、なぜゴミしかおらんのだ」

彼はそう言って、嘆くように俯く。

必死に説明しようとしても遮られて発言できなかつた男は、ただ沈黙して待つ。

男にとつてこれはいつものことで、主に文句を言つたところでどうにもならないことを知つてゐるからだ。

「はあ……それで、説明しろ」

「は。それでは、こちらの情報が他の派閥にバレたのかどうか……についてから説明させていただきます」

順番としては騒動のことからにするべきだが、主は保身が第一だ。

身の安全を保証してからでなければ、まともに話もできない。

男はそのことを知つてゐるので、話す順番を変えたのだ。

「今回、奴にはケルベロスを与えていましたが、我々のことは何一つ伝えていません。むしろ、國

王派の仕業になるように立ち回つてゐるので問題ありません」

「そうか……そうか……ならばいいのだが。だが、結局捕らえられたのだろう?」

「調べましたが、無能共はケルベロスにスキルを使わせて意識を失つてゐるとか、それに、万が一目を覚ましても、我々に繋がる情報はありません。だからどうかご安心ください」

13 転生幼女はお願いしたい4

「むう。そこまで言うのであればいいだろう。分かった」

「ありがとうございます」

男はそう言って深々と頭を下げる。

主はそう言ってやらねば安心しない小心者であることを知っているから。

「では、どうして騒動が収まつたのか……についてですが、正直分かりません」

「なに？」

「一応……孤児院で魔力水が作られたらしく、それが無償で配られ早急に騒動が収まつた……ということではあるらしいのですが……」

「孤児院……あやつの関係者か？」

「目下調査中ですが、ただ……その……不確実な話が出回っています」

男は少し迷いつつ、これも伝えるべきだと思つて報告する。

「なんだ？ その不確実な話とは」

「それが、魔力水を作つたのは年端じよはもいかぬ子供こどもたそで……。その子供と一緒にいる従魔も非常に強く、すじょう素性そせいが怪しい……という話が」

「はあ!? 魔力水を子供こどもが!? ありえん。それだけでもありえぬのに、強い従魔も従えている?

お前はなんの話をしているのだ？」

「その……今回の騒動を収めた人物の話です」

男がやはり伝えない方がよかつたかと思いながらも口にすると、主は笑い飛ばす。

「はつ！ 凝談ぎやうだんにしては過ぎるな。この愚か者が。そんなことのできる子供……一体どれくらいの確率で現れるのだ。百万年に一人でも足らんわ」

「申し訳ありません……」

「まあよい。策の全てが成功するとは思つておらん。だが、今回の騒動を解決した者のことについては早急に情報を集めろ。やり方は任せる」

「かしこまりました。必要なことがあつた際には、例のものを使用しても？」

「……かまわん」

「ありがとうございます。報告は以上です」

男はそう言つて部屋から下がろうとしたが、主がそれを止める。

「待て」

「はい？ なんでしょうか？」

「村の方は問題ないな？」

「はい。いたつて平穏な村ですし、監視員かんしいんも何も言つてきていません」「よし、では続ける」

「失礼いたします」

男は部屋を去り、主だけが残される。

「全く、ふざけた奴らだ。誰がこの国を統とうべるのに相応ふさわしいか、教えてやらねばな。そのためにもこんなことをした奴を見つけ出さねば」

◆ ◇ ◇ ◆ ◇

わたし達は大空の下をのんびりと進む。

「外は久しぶりですね～！」

「そうなのかい？」

「はい！　ずっと王都の城壁に囲まれていましたから！」

わたし達はいつものメンバー……わたしと従魔達、それに先生で王都の外に来ていました。

先生が来てくれたお陰で、十人の道案内をつけた必要はなくなつた。

それと院長が、『デル君達には自分が後で説明するからすぐに行つていいと言つてくれた。

もしも挨拶(あいさつ)をしていたら、半日は潰れるだろーから……と。

あとは宿の人にくロノさん達への伝言も残してあるので元璧だ。

わたしはワインの背中から降りて、城壁に囲まれていない、遠くまで見ることができる景色を久しぶりに楽しみながら進んでいた。

「ワイン様の背には乗らなくともいいのかい？」

「はい。王都にいた時はずっと乗つていて、階段を試しに上つたら息が上がつてしまつたので、少しは運動をしないとな……と」

ワインは少し残念そうだつたけれど、わたしが寝たきりになつてもいいのかと聞いたら納得して

くれた。それに、これ自体には他に意味がないこともない。

これから甘い物をいっぱい食べるのなら、先に動いてお腹を空かせておいた方が絶対にいいからだ。

「そうだね。確かに自分の足で歩くことも重要だと思う」

「はい！」

「だけど、危ないと思つたらワイン様を頼るつてことは忘れないでね？　サクヤ君に何かあつたらみんな悲しむから」

「分かりました！」

わたしはそう彼に返事をして、トテトテと歩く。

ワインと先生はわたしの歩く歩幅に合わせてゆつくりと歩いてくれる。

ヴァイスとルビーはわたし達の周りで追いかけっこをしていて、楽しそうにはしゃいでいた。

「サクヤ君達は王都でどんなことをしていたんだい？」

先生がそう聞いてくれたので、わたしは王都であつたことを先生に話す。

「すごいね！　あの問題を解決したのはサクヤ君か」

「いえ、わたしは特に……くロノさん達が今も頑張つてくれていますから！」

「それもだけどね。君の働きがなかつたら、本当に大変なことになつていただろーねえ」

「そ、そんな……というか、先生の方はどうだつたんですか!?」

なんかわたしの手柄とかの話になりそだつたので、ちょっと強引に話題を変える。

「ああ、こちらは特に問題はなかつたけど……」「けど……？」

「みんなサクヤ君に会いたがつていたよ。また遊びに来てほしいとね」

「みんな……」

「うん。クー・シーやアベルとかみんなだよ」

「そうですね。どこかのタイミングでまた遊びに行きたいです！」

今は王都を出るのは面倒だけれど、転移魔法を覚えられれば……と思わないでもない。

魔法都市とか……そこに行つたら覚えられるのかな。正直そのためだけにも行つてみたいと思う。

「うん。いつでも待つていてからね」

そんなことを話していると、あつという間に夜になつた。

結局、途中からはわたしの足が疲れてしまつたので、ウインが強引にわたしを背に乗せて進んだ。野営の準備は先生がやつてくれたんだけど、長年フィールドワークをやつているからか、その手つきは手慣れていた。

「さ、ご飯もできたよ」

「ありがとうございます……」

わたしは座つたまま、ヴァイスを呼んで抱っこしようとする。

すると、ヴァイスが伸びた。

わたしは彼を持ち上げようとしたなんだけれど、後ろ脚はわたしのひざの上に乗つっていて、上半身

はいつものままだ。  
「ん!?」  
「ウビヤ？」  
「ねえ、ヴァイス……成長した？」  
「ウビヤウ？」  
何？と首を傾げるヴァイス。  
この伸び方……これはまごうことなき猫科のあれ！ 抱っこしたら伸びると思うあれだ！  
「すごい……やつぱりヴァイスは聖獣でも猫科なんだね……」  
「ウビヤウ？ ウビヤ！」  
「キュキュイ！」

わたしがヴァイスを伸ばして遊んでいると、自分も自分もルビーが出てくる。

なので、わたしはヴァイスをそつとひざの上に戻し、今度はルビーを抱っこする。

「キュキュイ！」

「うそ、ルビーもこんなに伸びるの!? 知らなかつた……」

「知らなかつた……」

擬音にするとニヨーンという感じでルビーが伸びた。

今では全身を抱えるように抱っこしていただため、半身だけでやるとこんなことになるとは知らなかつた……。ちょっと楽しい。

「……」

わたしはヴァイスとルビーを伸ばしたり、彼らに舐められたりしながら遊んだ。

そして、あとは眠りにつくだけという時に、ワインがいつもと違った行動を取る。

ワインは猫がニヤンモナイトする時のように柔らかく丸まつていた。

「ワイン？ いつもの丸くなつてうずくまる感じじゃないの？」

「今回はこれだ。いいから乗つてみろ」

「う、うん」

いつものような、わたしがもたれかかる感じではない。  
犬なのにニヤンモナイト……いやワンモナイト？ をしているワインの上にわたしは登り寝転がる。

「おお！ すごい！ すごいよワイン！」

「ふふん。だろう？ 僕だつて伸びることはできる」「

そう言つて自慢そうに口元を歪ゆがませる。

ワンモナイトの姿で笑うのはちょっとおかしかつたけれど、この柔らかさは今までとは違つていた。

これまでにもたれかかつて包まれていたけれど、今度の包まれ方はまるで違う。

例えるなら、前は高反発マットの上で寝て、ワインの毛に包まれているような感じだった。  
でも今回は、低反発マット……いやウォーターベッドに包まれて、さらにその上から毛で包まれている。そんな状態なのだ。

「すごい！ こんなことができたんだね!?」

「当然だ。俺は聖獣、できないことはない」

「それを今使うのはどうなんだつていう気持ちもあるけれど……」

もつとかつこい時の使い道はなかつたのだろうか。

「サクヤを驚かせる以上の使い道などない」

「さいですか……でもすごい！」

ということで、わたしはワインの体に潜り込み、素晴らしい寝心地を体験するのだった。

翌日、わたしが目を覚ましたのは、日が高くなつてからだつた。  
「ワイン……これは……本当にじっくり寝てもいい時だけにしよう。じゃないとずっと寝ていちゃう……」

「そうかもしれないな」

「先生。すみませんでした……」

「良い子は寝るものだ。寝なくては育たないからね。気にしなくてもいいよ」

先生はこう言つてくれていいけれど、わたしがワインにこれを頼むのは時間が余つていて、翌日に用事がない時だけにしようと誓つた。

それから半日ほどして、夕方になつたくらいで、わたし達はスウォーティーの村に到着した。

わたし達がスウォーティーの村に近付くと、甘い香りが漂つてくる。

それもドーナツの揚げたてのような香りに、何かを焼いたような香ばしい匂い、はちみつらしき甘い匂いなど……様々な香りがあるようだ。

こうなるともう村の全てが甘いものでできているんじや……と思えるくらい。

「すごい。もう甘い……お菓子の家とかありませんかね？」

「あはは、すごいことを思いつくね。あつたとしても、すぐに食べられてしまふから残らないと思うな」

「で、ですよね？」

流石にそういうのはないらしい。まあ、あつても食べたいとはならないけど。

「さ、ここで待つているとお店や屋台が閉まつてしまうよ」

「！ 急いで行きましょう！」

ということで、わたし達は揃つて村に入る。

ワイン達の従魔証はちゃんと見せたところ、結構好意的な反応が返つてきた。従魔に対する反応が王都と違つて好意的なのは嬉しい。

そのことについて、先生が教えてくれた。

「この村では代々、養蜂をしていてね。それで従魔……というか、魔物に対しても結構緩いんだ」「え？ この村では蜂の魔物が飼われているんですか？」

「飼われている……というのはちょっと違うかな。ハニー・キラービー、という魔物が近くの森にいるんだ。彼らと取引をして、必要な分のはちみつを分けてもらい、彼らが必要な分の食事を与えたり、環境を整えたりして、共存しているんだよ」

「すごいですね……」

「まあ、最初は反発もあつたけれど、こうやって村が大きくなつたらみんな黙つたよ」「もしかして、先生がその話を提案したんですか？」

「当然だね」

先生は嬉しそうに頷いて、周囲を見回す。

村……というか、町と言つてもいいレベルで大きく、道を歩いている人も、平民から貴族らしい格好をした人まで、様々な人達がいる。

彼らは手に菓子のようなものを持ち、楽しそうに歩いていた。

「……どうしてこんなにも栄えているんですか？」

「南の方からも砂糖を輸入してるとか、とある高貴な方が協力してくれているつて話もあるけれど……歴史のお勉強は、今はいいんじゃないかな。それよりも、屋台で食べたくなるものがあつたら買つていこう」

「はい！」

今回わたしの軍資金は底なしと言つてもいい。

これでいっぱい……いっぱい色んなものを買つて食べるんだ。そのためにたくさん歩いたから、きっと問題はないはず。

ということで、わたしはワインの上に乗せてもらつて、両サイドに屋台が立ち並ぶ大通りを進んでいく。

「くつ……こんな時に文字が読めれば……」

看板には時折文字が書いてあり、その店で売つているものが書いてあるのだろう。

でも、色々とあって文字を習えていないわたしは、先生に頼るしかなかつた。

「あれはクッキーだね。クッキーっていうのは……」

「なんのクッキーですか？」

「クッキーを知つてているのかい？」

「はい？ 知つてますよ？」

なんで？ クッキーは小麦粉とか重曹とか牛乳、砂糖を加えて伸ばして型を取つて焼いたものだと思うんだけど……。

「そうか、サクヤ君はいい所の生まれなのかな？ クッキーを知つている平民なんて、そういうな  
いからね」

「あ、あはははは、どうだつたんですかねー」

自分が記憶をなくしているという設定をすっかり忘れていた。

まあ、先生もそういうことをそこまで気にするような人ではないので、なんとかなるだろう。  
「まあ、クッキーは結構広まつていてるからね。そういうこともあるだろう。あそこのは普通のクッ  
キーのようだね。基本の味で勝負するらしい」「なるほど、基本なら食べてみないといけませんね」

「では買つてくるとしよう」

「はい！ と、これを使つてください！」

「ウビヤ！」

「ヴァイスはダメ」

わたしはポーチに飛びつこうとしたヴァイスを押さえて、金貨を一枚、先生に差し出す。  
すると先生は、驚いてそれを両手で包んだ。

「サクヤ君。金貨をここで出してはいけないよ。それと、屋台で高額の硬貨を出すのは嫌がられる  
からやらない方がいいね」

「あ……なるほど」

日本でも、屋台で一万円札を出されたら嫌がれたりするつて聞いた気がする。確かに、数百円  
の商品なのに、一万円札を使う人ばかりいたら困るか……。

「すみません……」

「いや、すぐに分かつてくれて嬉しいよ。幸い、ぼくが小銭を持っているからね。そちらを使

「おう」

「ありがとうございます」

「気にしてないで。君にしてもらつたことを少しでも返せるなら、ぼくとしても嬉しいよ」

先生はそう言って、クッキーをみんなの分買っててくれる。

一人一枚ずつ。わたしとしても、色んなのを食べてみたいので、とてもありがたい。

ということで、わたし達はクッキーをかじる。

「！ 美味しい！」

クッキーは甘すぎず、かといつて甘くないただのビスケットとも違う。サクッとした歯ごたえは素晴らしい。嚙んでいるとほんのりと甘さを感じられて美味しい。

「ウビヤウ！」

「キュキュイ！」

ヴァイスとルビーは、ワインの上で思い切り食べかすをこぼしながら豪快に食べている。

ワインの上に落ちてしまつたのは、後で掃除しておこう。毛の中に入つてしまつて、今は取れないからだ。

「お、あつちは……チーズケーキだね」

「チーズケーキ！ そんなのもあるんですね！」

チーズケーキ。レアだろうか？ ベイクドだろうか？ どっちでもいい。いいから早く食べたい。思いが通じたのか、先生は苦笑しながら買いに行つてくれた。

そして、それも一人一つずつ買つてくれる。

一ホールではなく、一ピースといった形で、片手で持つて食べやすいサイズだ。わたしの体だと両手で持つた方が安定するから、そうやつて食べるけど。

「美味しいです！」

はちみつの甘さがしつかり主張された味わい。そこに後からチーズの香りがこれでもかと追いかけてくる。

「すごい……ここつてすごいんですね」

わたしがさらに目を移すと、そこにはフルーツがたっぷりと載せられたタルトを持っている人がいた。

「……先生。わたし、あれが食べたいです」

「ぐぐぐ、うん。あれは確かに……もう少し行つたところのだったかな。ワイン様。ぼくは先に行つてるので、後から追いかけてきてくださいますか？」

先生の言葉にワインは頷く。

「じゃあ少し行つてくるよ。あれは並ばないといけないはずだからね」

「それならわたしも……」

「ワイン様の大きな体で並ぶのはよくないよ。だから待つておいてほしい」

「はい……」

ということで、わたしは食べ終えてから先生が並んでいる近くに行き、そこでタルトを待つ。

「はい。どうぞ」

「ありがとうございます！」

わたしはタルトを受け取り、こちらに来て開けたことないくらい大口を開けてタルトを頬張る。

「んくく！――！ 美味しいです！」

タルトにはイチゴやバナナ、キウイやブルーベリーっぽい味のものが載っていた。果物ははちみつ漬けにでもされていたのか、普通のものより大分甘い。でも、それらを支えているタルトは甘さがなく、組み合わさったことで最高の味わいになっている。

「すご……もう……ここに住みたい」

それくらいに甘い美味しいものばかりで、目移りしてしまう。

「ふふ、サクヤ君。あんまり食べすぎると、メインディッシュが食べられなくなるよ」

「は！ そうでした……」

「もう少しでその場所だから、期待していてね？」

「はい！」

わたし達が少し移動すると、そこには夜であるのに長蛇の列ができていた。

その店は、今回の目的であるファイナルスペシャルロールロールケーキを売っているお店、パステールだ。

外観は白い大理石でできたかなり大きな店。長蛇の列もいつものことなのか、それ専用の店員さんが列誘導をしている。



わたし達はその店……パステールに並ぶ。

「どんな味なのかな……楽しみだな……」

口の中にどんな味が広がるのだろうか。考へていてるだけで楽しい気分になる。これが甘いもの  
の力。

ここまで歩いてきて、ほどよく疲れているのもあるだろう。

そんなことを考へて待つてると、若い女性の店員さんが列の全員に、何を頼むのか聞いて回つ  
ているのに気付いた。

すぐに彼女はわたし達の所に来て、先生に尋ねる。

「何をご注文されるかお決まりですか？」

「彼女に聞いてくれるかな？」

「かしこまりました。お嬢さん。何が食べたいか決まってるかな？」

彼女は小さい子への優しい対応で、しかも視線をわたしに合わせるようにしゃがみ込んでくる。  
わたしは楽しみにしていたため、少しばかり大きな声で答えた。

「ファイナルスペシャルロールケーキが食べたいです！」

「……」

しかし、彼女は少し困った顔をし、周囲の人達も苦笑いをしていた。

「なんでだろう？ そう思つていると、答えはお姉さんが教えてくれた。

「……」

「……」

「ごめんね。その品は今予約待ちで、一年以上待つてもらわないと買えないの……ごめんなさい」「あ……」

その話は院長に聞いていたんだつた。

楽しみすぎて忘れていたや。

でも、こんなこともあるうかと、院長から紹介状を貰つていてるのだ。

「これでなんとかなりませんか！」

わたしはポーチから院長に貰つた紹介状を取り出し、お姉さんに渡す。

彼女はちょっと困った顔で受け取つた後、それの裏面を見て動きをピシリと止めた。

「……」

「あの」  
「ひゃい！ も、申し訳ございません！ しばしお待ちいただいてもよろしいでしょうか!?」

「え？ ええ、はい」

「失礼します！」

彼女はそう言つて、全速力という感じで店の中に消えていった。

「なんだつたんだろう」

「さあ、どうしたんだろうねえ……」

先生は、楽しんでいるようにも見える。まるで理由を知つてゐるみたいだ。  
でも、単純に笑顔なだけかもしれない、答えは分からない。

『ワイン、なんなんだろう』

『サクヤの素晴らしさに気付いたのだろう』

『最初は普通の扱いだったのに?』

村の中なので、ワインが喋ることをばれないように念話をしていると、さつきの店員さんが、すごくダンディなおじ様を連れてくる。

紳士服がパシッと決まつていて、すでに夜の時間なのに疲れた様子もない。

「お待たせしました。私、パステールの店主をしている者です」

「え……はい。それで店主さんがどうして?」

「詳しいお話をするために、店内へお越しただいてもよろしいでしょうか?」

「はあ」

わたしが先生の方を見ると、彼は頷いてくれる。

あ、でも、そもそも従魔を入れるのはまずいだろうからと、テイクアウトのために並んでいたんだよね。店内に入つてもいいのかな。

「あ、でも、この子達は……」

窺うように店主を見ると、彼はダンディなスマイルで頷いてくれる。

【厨房でなければ問題ありません】

「分かりました」

厨房は流石に行くことはないだろう。なので、みんなで彼についていく。

案内されたのは白で統一された部屋で、広さも二十畳は余裕である。中央には長いテーブルが置かれ、イスも大きくきれいなものが十個以上も並んでいた。

なんでこんな部屋に……と思いながらわたし達が席につくと、店主がすぐに頭を下げる。

「大変申し訳ありません。本日のファイナルスペシャルロールロールケーキは売り切れてしまつていまして……」

「あ、はい……」

でもなんでわざわざ、謝るためだけに部屋に呼んだのだろうか?

と思っていると、彼の口からとんでもない言葉が飛び出す。

「大変申し訳ありません。明日には確実にご用意いたしますが、本日来ていただいたサクヤ様のために、当店で今用意できる品をなんでもご用意いたします。当然お代はいただきません。それで納得していただけないでしょうか?」

「……」

え……これ……ええ……。

買いたいものが売り切れていたから、代わりに他のものを無料で、つて……ええ……。

どうしようと思つて先生を見ると、流石に目を見張つて驚いている。

わたし達の返事を待つてゐるのか、店主とその後ろにいたお姉さんは頭を下げたままだ。流石にそれは悪いと思うので、わたしは頭を上げるように言う。

「ちょ、ちょっと頭を上げてください。というか、別に今買えないなら明日また来ますから」

「いえ、そういう訳には参りません。どうか食していつていただけないでしようか」

「……わ、分かりました」

なんか領かないと納得してくれなそしだったので、領く。

「ありがとうございます。お持ちしろ！」

店主がすぐに頭をあげて、後ろに向かつて言うと、ドヤドヤと五人のウェイターが入ってきて、次々にテーブルの上にお菓子を置いていく。

二人と三、四体？ では絶対無理だろこれ……という量が置かれていて、正直戸惑う。

「売り切れのもので、これが欲しいというものがありましたらお申し付けください。すぐにご用意いたしますので」

「い、いえ。これだけ出していただければ……」

「それともう一つ」

「まだあるんですか!?」

これでも十分だと思つていたけれど、まだあるみたいで、わたしの驚きはまだまだ続きそうだ。

「ミエーレ！」

「失礼いたします」

店主さんに呼ばれ、部屋に入つてきた人を見る。

その人はコック……いや、パティシエの服を着ていた。

ミエーレと呼ばれた彼は、金髪を背中に垂らすようにまとめていて背は結構高い。表情は見るか

らに自信満々といったものだ。

わたしやヴァイス達を見て一瞬眉<sup>まゆ</sup>を寄せたが、他の人は気付いた様子はない。

なのでわたしの勘違いかもしれないと思う。

「ご紹介にあずかりました。ミエーレと申します。本日は菓子のご紹介をさせていただきます」

「ということで、菓子のことでお聞きしたいことがありましたら、このミエーレにお聞きください。

新人ではありますが、その腕前はベテランにも匹敵しています。なにとぞよろしくお願ひします」

「はあ……」

そんな、お菓子の説明の人とかいらないと思うんだけど……と思つていたら、先生が耳元でささやいてくれる。

「ああやつて菓子のことを教えるということをしつつ、パティシエの顔見せを貴族にしているんですよ。王都の貴族のパーティーに呼ばれるように、人脈作りにもなつてているんだ。だから受け入れてあげて」

「はあ……」

わたしは別に貴族でもないし、パティシエを呼ぶようなことをするつもりもないんだけど……。まあ、説明してくれるのであればいいか。

「よろしくお願ひします！」

「……ええ」

ということで、わたしは必要な時にだけ頼もうと思つて何から手をつけようか迷う。

「これだ！」

わたしは少し迷ったあと、近くにあつたバウムクーヘンを取つた。  
きれいな円形になつていて、それを自分で食べる分だけ切り取る。

ちなみに、他の子達や先生は食べたいものをするに取つていたから、手伝う必要はない。その姿を見て、彼が口を開く。

「それはバウムクーヘンと言つて、ここでも歴史あるお菓子なのです」

「そうなんですね！ 確かきれいな円を作るのが難しいんでしたつけ？ すごいです！」

「……はい。よくご存じですね」

「お菓子が好きなので！」

ということで、わたしは彼との話もそこそこにバウムクーヘンを食べる。

ふんわりとした歯触りに、しつとりとした感触が舌の上に広がつた。

前に出過ぎず、かといって主張をしない訳でもない。芯はないけど、確かに心があるようを感じられるとても美味しいものだつた。

「すごい……確かに作るのも大変なんですねえ」

「作り方を知つておいでなのですか？」

「ミエーレさんのように知つてている訳じゃないですよ？ 確か小麦粉、バター、砂糖、卵とかを混ぜて細長い棒に層を作つていくように塗りながら焼いていくんでしたつけ……。ああ美味しい」  
わたしはミエーレさんの言葉に、確かにそんな感じだつた気がするという適当なことを言いながら、

美味しいバウムクーヘンを食べる。

一つ食べきつてしまつたところで、わたしはこのままではまずいことに気付いた。  
いけない。これだけを食べていては、満腹になつて他のものが食べられなくなる。  
いっぱいあるんだから、ある程度は選んでいかないと。

こんな時は、子供であるこの姿が恨めしい。

「……」

「ワインも食べたい？」

わたしが美味しく食べていたからか、ワインが食べたそうな顔をしていた。  
聞いてみると頷いたので、バウムクーヘンを切つて彼の前の皿に置く。

『美味しいぞサクヤ。菓子を見る目もあるのだな』

『たまたまだよ。次のを食べよう？』

わたしはそう返して、次のお菓子を取る。

「次は……これがいいかな」

わたしが手に取つたのはカヌレだつた。

ふんわりとしたものを食べたから、次は少し硬いものを食べたい。

そう思つて手に取つたのだが、すぐにちょっと驚いて手を放す。

「温かい？」

「はい。カヌレは焼きたてがもっと美味しいので、当店では焼きたてのものしか販売しておりま

せん

「なるほど……」

わたしは再び手に取つて口に入れる。

カリッ！

！」

カリカリになつたカヌレに歯を突き立てるとき、口中にはほろ苦さのある甘みが広がる。ずっと甘かつた口をリセットしてくれているようで、とても心地よい甘さだ。外側はカリカリだつたけれど、中はモチモチとしていてほろ苦かつた甘さをよりよい甘さに変えてくれる。ミエーレさんがわたしに尋ねてくる。

「お味はいかがですか？」

「すっごい……このカリカリ感……たまりません。周りの蜜蠍<sup>みつろう</sup>が美味しいからなんですかね？ バターではこんなにいい味は出ないと思いますし、艶感<sup>つや</sup>もとても素敵です」

最初はかじることしか考えていなかつたけれど、いざ食べてみて、カヌレの外側を見るととも美しい見た目をしている。

「それにこの中に入つてゐる気泡も、ちゃんと温度管理をしているから出でているんですね。結構温度が低くなつたりして、大変なんですね～」

確かにこれもそんな話を聞いたことがある。

思つてゐることを適当に話すと、ミエーレさんが口を開く。

「ええ、当店では温度管理を任されるのはとても重要な仕事です。日々美味しいお菓子を食べていただけるように邁進<sup>まいしん</sup>しております」

「そうなんですね～。これ、本当に美味しいです」

わたしはそんな感じで、食べながら彼に聞かれたことを適当に話したりする。

「……」

「ルビーも食べてみる？」

今度はルビーがじつとわたしを見つめていたので、そう提案すると頷く。

「はい。どうぞ」

「……キュイイイイイイイイイイー！！！」

「ははは、美味しいんだね」

ルビーはカリカリの食感が好きなのか、それから何個もカヌレをカリカリと食べて喜んでいた。

かわいい。

ちなみに、ヴァイスは全部制覇<sup>せいか</sup>するつもりか色々なお菓子に挑戦していて、わたしの出る幕はなかつた。

それから何種類かのお菓子を食べて、もうこれ以上食べられないというくらいまでお腹に詰め込んだ。

「もう……お腹いっぱい……」

美味しそうで止めることができなかつた。

「ふう……」

「あの……高貴な方にお願いしていいのか分かりませんが、一つだけ……よろしいでしようか？」

「え？ わたしですか？」

別に高貴な生まれでもなんでもないですけど？」

でも、とりあえず話を聞いてみよう。

「あの、とりあえず、どんなことでしょうか？」

「はい。サクヤ様、あなたのアドバイスが欲しいのです」

アドバイス……とはなんのアドバイスだろうか？

◇◆◇◆◇

私はミエーレ。スウォーティーの村一番のパティシエである。

いや、本当はまだ一番ではない。だが、それに近い実力はあると自負している。

村一番のお菓子店。パステールに若くして入り、腕前も店で上位に食いこむ。

だからこうして今も、高貴な方々の相手をしている訳だが……この幼子は、今まで出会つてきた者達とは違う。

あれが嫌い、これが嫌いとわがままを言つて騒ぎまくつていた貴族のガキ共。こんな辺境に来たくないと騒いでいたけれど、私達の菓子を食べたらすぐに黙つた。

今回もその類だと思つていた。  
それが……。

「はい。サクヤ様、あなたのアドバイスが欲しいのです」

私がこんなことを頼むなんて。

「よく分からないので、最初から話していただきたいですけど？」

「はい。実は……」

それから、私の頼みごとを話す。

私はオーナーから期待されていて、新しいお菓子を作つてほしいと依頼されているが、それが上手くいっていないこと。

一人で何度も考えたけれど、全く出てこなかつた。私はお菓子ならなんでも作れると思っていた。

先輩達のお菓子も、私に作れないものはない。

でも、自分で新しいものを……となつた時に、何もできなくなつた。

だから、そのためのアドバイスが欲しいということを、彼女に話した。

私にもプライドがあるから、多少ばかして……ではあるけれど。

「それは……もちろん構いませんが、わたし、お菓子作りは素人ですよ？」

これは私に気を使つてくれているのだろうか。

さつきから、お菓子の作り方をたくさん見てきたかのように、あれだけ話していたのだ。

そんな彼女が素人な訳がない。

きっと王都……もしくは他の国の高貴な生まれのはずだ。

気品があるし、知識の量も豊富で平民であるはずがない。

私がパーティシエだから、気を使ってくれているのだろう。そういうふた気配りもできる、すごい幼子だ。

「ええ、あなたのような方の助言を貰えるのであれば、私のお菓子作りもきっと進むと思います」「分かりました。では厨房まで行つた方がいいですか？」

「……来てくださるのですか？」

「？ そうじゃないとアドバイスできないかと思うのですが……」

可愛らしい顔を少し傾けて、そう言ってくれる。

普通だつたらすぐに持つてこいと上から言われるところだが、彼女は作り方を見て手伝ってくれるとは。

「かしこまりました。ではこちらへ」

「はい」

ということで、私は彼女を連れて厨房に入ろうとして、少しだけ待つてもらう。

「その……大変申し上げににくいのですが、従魔の方々はここでお待ちいただいていいでしょうか？」

私がそう言った途端に、おおがみ狼の目が据わる。

一瞬、自分の体が真つ二つにされる姿を幻視したが、体を触つても何もない。

「あはは、分かりました。ウイン、わたしは大丈夫だから待つてて」

「……」

彼女はそう言つて狼の従魔に抱きつき、落ち着けている。

それから、狼の上に虎とウサギの従魔、それからなぜか木彫りの龍を置いて、彼女は部屋を出た。私達は厨房に入ったが、決して彼女に何もしないようにと心に誓う。

元々アドバイスが欲しいだけで、何かをするつもりはなかつたけれど……あの狼の圧がすごいのだ。

厨房は集中して新作の開発ができるよう作られていて、小型ではあるけれど、最新の道具が所狭しと置かれている。

それから私はすぐに、新しく作ろうとしているパウンドケーキの作り方を見せる。

完成するまでに時間がかかるけれど、彼女はじつと黙つて見ていてくれた。

「こうやつて……こうして行こうと思っています。それで……どうでしようか？」

「ふーむ。とりあえず味見をしてもいいですか？」

「どうぞ」

「では遠慮なく」

彼女はパクリと食べて、その可愛い目を輝かせる。

「これ、とつても美味しいですよ！」

「本當ですか？」

「本當です！ 今日食べた中で一番だと思います！」

嬉しいことを言ってくれる。

撫なでてあげたいところだが、狼の顔がちらつくのでやめておいた。

「ありがとうございます。ですが、これではまだ足りないのです」

「そうなんですか？」

「はい。このパウンドケーキは今のシェフパティエ、厨房で最も偉い方が開発されたものなんです」

「なるほど……」

「改良を少し加えてはみたものの、これといって納得がいかないんです」

「ふむ……ちなみに、どんな改良を施したんですか？」

「このパウンドケーキには、この村特産のはちみつが使われています。カヌレの蜜蠍もそうですね。はちみつがこの村の特産品でもありますので」

私がそう言うと、彼女は少し考えてから口を開いた。

「はちみつと合わせるなら、レモンとかはどうですか？　あ、でもこっちにあるのかな？」

「レモンはこの辺りでもありますよ？　黄色く、酸っぱい果実ですよね？　一度試したのですが、

果汁ではレモン特有の酸味が飛んでしまい、皮まで入れると今度は苦みがでてしまうのです」

「そうです、その酸っぱいやつです。それなら皮だけ入れてみてはいかがでしょうか？」

「皮だけ？　それならもうすでに試してみたのですが」

「皮だと言つても、白い所？　を使わないで作るということです。確かにこうやって作つたらどう

だつたかな……なんて」

「皮……黄色い部分だけを入れるということですか？」

「はい」

彼女は思い出すようにそう口にするが、その年で思い出すようなことはほとんどないだろう。きつと、私のために本気で考へてくれているに違いない。

なら、彼女の言う通りにやつてみよう。

「では、早速作つてみますね」

「はい！」

ということで作り始めたのだけれど、その途中、レモンの処理の時に止められた。

「あの、ちょっとといいですか？」

「なんでしょう？」

「レモンの皮は黄色い所だけ使うんですけど、それをみじん切りにしてから入れてみてください」

「……分かりました」

彼女はもしや、想像だけで味を思い描くことができるのではないだろうか？  
あるいは、もう食べたことがあるような……ここまで手順を当たり前のように言うのだから、そう思わずにはいられなかつた。

ううして、はちみつレモンケーキとでも呼ぼうか。そういうものができた。  
「では早速……」

「はい」

ということで、私達は同時にそのケーキを口に入れた。

◇ ◆ ◇ ◆ ◇

わたしがミエーレさんが作ったはちみつレモンケーキを口に入れると、しつとりした食感にほのかな甘酸っぱい味が、口中いっぱいに広がる。

「美味しいですよ！ これ！」

「はい！ とっても美味しいです！」

パウンドケーキにはちみつって言つたらレモンくらいしか思い浮かばなかつたので、適当に言つたらミエーレさんが上手いこと作つてくれた。

彼の笑顔もとても素敵で、甘いものが人を笑顔にさせるのは、世界が違つていようが共通なのだ。アドバイスを求められた時はマジでどうしようと思つたけれど、なんとかなつてよかつた。

彼の力になれてよかつた。

「これでミエーレさんの問題も解決ですね！」

「ええ、ありがとうございます。この御恩は忘れません。パーティシエが必要になつた時は、ぜひとも私をお呼びください。王都くらいでしたらいくらでも行きますので」

「いえいえ、ミエーレさんの美味しいお菓子を食べられただけで満足ですよ！」

「……ありがとうございます」

彼は結構自信家だったよう見えたけれど、すつとわたしに頭を下げる。「頭をあげてください！」

「いえ……本当にありがとうございます。これで、上司も認めてくれるでしょう」

「それでは戻りませんか？ 今日はもう大分遅いので」

「すみません。こんな時間まで付き合わせてしまって」

「ミエーレさんのお菓子作りはとっても洗練されていて、かつこよかつたので、楽しかったですよ！」

お菓子作りの動き一つ一つのキレが違うと言つたらいいだろうか。動く時は動き、止まる時は止まる。一種の芸術作品のようにも感じていたくらいだ。

「ありがとうございます。このお菓子……持つてかれますか？」

「いいんですか？」

「はい。私はまた何度でも作れるので、待たせてしまつてある方に食べさせてあげてください」「ありがとうございます！」

「では、戻りましょう」

「はい！」

わたしは貰つたはちみつレモンケーキを切り分けてもらい、紙で包んでポーチの中という体のアイテムボックスに入れる。